

現代の学生の疲労感に関する観察：自覚的疲労症状についての検討

著者	佐々木 ふさ
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	12
ページ	61-68
発行年	1979
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001948/

現代の学生の疲労感に関する観察

— 自覚的疲労症状についての検討 —

An Observation on the Sense of Tiredness among Present Day Students

— Examination of Its Self Consciousness —

佐々木 ふ さ

Husa Sasaki

I はじめに

最近の学生について健康管理を的確に実施し、観察指導するためには、学生身心の状態を保健学的、衛生学的立場から総合的に把握し、適切な生活管理並びに保健指導を行なって、充実した学生生活が営まれるように配慮してやらなければならない。そのためには、学生の生活条件や生活行動が身心にどのような影響を及ぼしているかを客観的に評価し、保健管理、指導のための基礎資料を必要とする。その意味において学生の疲労・性格を調査し、それを学生生活条件と学校生活とのかかわりあいのうえで衛生学的に把えることは、学校保健内容として極めて重要な意義があるものと考え、学生生活条件と自覚的疲労症状について調査・性格テストを実施してその検討を行ない、自覚的疲労症状の生活条件によってどのような変動がみられるか、本学の学生を対象として、学校の授業の午前と午後における自覚的疲労症状を5日間にわたって継続調査し、若干の興味ある知見について報告し、専門的分野から今後もその追跡調査研究を望んでいるのである。

II 調査方法

1. 調査対象

本学学生2年生で同一学科コースの182名を対象に、月曜から金曜の5日間について調査した。5日間をとおして調査できた者は182名であった。

対象者の年齢は19才から20才である。

2. 調査方法

自覚的疲労症状を授業の午前、午後の2回にわたって5日間継続して調査した。なお調査の方法、及び調査時点は次のとおりである。

(1) 方法 (図1 参照)

産業疲労研究会の「自覚症状しらべ(1970)」を用いた。I群10項目は「ねむけとだるさ」に関するもの、II群10項目は「注意集中の困難」に関するもの、III群10項目は「局在した身体違

和感」に関するもので、全体で30項目からなっている。

(2) 調査時点 (表1 参照)

時間割の都合で、授業後の調査時点は調査日によって異っている。各調査日の授業内容は、すべて教室内での講義、または実習終了である。

表1 調査時点

		午前授業後	午後授業後
第1日	(月)	12:30分	16:30分
第2日	(火)	12:30	16:30
第3日	(水)	12:30	16:30
第4日	(木)	12:30	16:30
第5日	(金)	12:30	16:30

(3) 調査期間

昭和54年9月17日(月)～9月21日(金)

図1 「自覚症しらべ」調査表

自覚症状しらべ

昭和54年 月 日 (曜日) 午前・午後 時 分現在
(学生番号・)

A いまの貴女の状態についてお聞きます。次のようなことがあったら○, なかったら×を右枠の中につけて下さい。

I	II	III
1 頭がおもい	11 考えがまとまらない	21 頭がいたい
2 全身がだるい	12 話をするのがいやになる	22 肩がこる
3 足がだるい	13 いらいらする	23 腰がいたい
4 あくびがでる	14 気がちる	24 息苦しい
5 頭がぼんやりする	15 物事に熱心になれない	25 口がかわく
6 ねむい	16 ちょっとしたことが思いだせない	26 声がかすれる
7 目につかれる	17 することに間違いが多くなる	27 目まいがする
8 動作がぎこちない	18 物事が気にかかる	28 まぶたや筋肉がピクピクする
9 足もとがたよりない	19 きちんとしていられない	29 手足がふるえる
10 横になりたい	20 根気がなくなる	30 気分がわるい

B いま貴女の疲労感(疲れをどのくらい感じているかということ)についてお聞きます。

仮りに「非常にさわやかで疲れを全く感じない」という状態を[1]とし「疲れがはげしくてもうこれ以上働けない」という状態を[9]とすればいまの、貴女の疲労感は何のくらいですか。その数字を○で囲んで下さい。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	
← 疲れていない									疲れている →

III 調査結果

自覚的疲労症状の訴え率は、次の算出方法で求めている。

$$\text{訴え率} = \frac{\text{その対象集団の総訴え数}}{\text{対象集団人数}} \times 100 (\%)$$

表2 自覚的疲労症状各項目別の訴え率

N=182

群	項目	訴え率 %		群	項目	訴え率 %		群	項目	訴え率 %	
		午 前	午 後			午 前	午 後			午 前	午 後
I	1	24.7	8.4	II	11	10.3	3.8	III	21	9.3	5.6
	2	11.8	3.8		12	3.1	1.2		22	24.0	9.1
	3	4.2	1.7		13	4.9	1.1		23	8.2	4.6
	4	17.0	5.3		14	10.0	1.9		24	4.9	2.5
	5	25.6	5.9		15	1.9	3.3		25	11.4	6.0
	6	34.2	8.9		16	8.8	3.3		26	10.8	3.4
	7	24.1	6.3		17	3.9	1.9		27	4.2	2.3
	8	2.6	0.3		18	11.9	1.4		28	3.4	1.2
	9	1.3	1.3		19	3.7	0.8		29	0.3	0.3
	10	20.3	6.1		20	16.1	2.7		30	5.7	2.3
平 均		16.6	6.0	平 均		9.2	2.2	平 均		7.7	3.9

表3 各調査日の自覚的疲労症状各群別の訴え率

調査日	人数	午 前			午 後		
		訴 え 率 %			訴 え 率 %		
		I	II	III	I	II	III
第1日(月)	n=182	24.2	16.7	11.0	0.7	0.4	1.5
第2日(火)	〃	19.8	11.6	8.4	6.6	1.9	3.7
第3日(水)	〃	22.1	11.4	8.7	3.9	1.8	3.8
第4日(木)	〃	12.8	5.0	7.7	2.8	1.6	3.8
第5日(金)	〃	4.4	1.4	2.5	10.3	5.3	6.7
5日間平均		16.7	9.2	7.7	6.0	2.2	3.9

1. 自覚的疲労症状の訴え率と症状群の構成 (表2, 表3 参照)

182名のⅠ・Ⅱ・Ⅲ群の訴え率は、午前授業ではそれぞれ16.6%、9.2%、7.7%、午後授業ではそれぞれ6.0%、2.2%、3.9%であった。各項目別にみると、Ⅰ群では午前・午後授業とも訴え率が高くなり、10項目中7項目24.1%で、Ⅱ群では「14気がちる」「20根気がなくなる」、Ⅲ群では「22肩がこる」、「25口がかわく」という項目に訴え率が集中しており、午前・午後の授業とも大体同様の傾向がみられた。

症状群の構成(症状群の訴え率の順序関係)についてみると授業の午前、午後ともに「吉竹氏」(労働科学研究所)のいう「Ⅰ>Ⅱ>Ⅲ」型、すなわち精神作業型となっている。各調査日ごとにみても、12調査例(それぞれの調査時点を1例とする)ともすべて「Ⅰ>Ⅱ>Ⅲ」型となっているのである。

2. 自覚的疲労症状の訴え率の変動 (表4 参照)

月曜日から金曜日までの5日間をとおして調査できた182名について、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群の訴え

率の変動を日内変化度すなわち各調査日の午後授業訴え率と午前授業訴え率の差で、各個人のそれぞれの訴え数の差によって検討してみると、月曜日のⅡ群の訴え率のみ午前授業が有意に高くなっている。

週内変化度すなわち金曜日の午前授業の訴え率と、月曜日の午前授業の訴え率の差で、各個人のそれぞれの訴え数の差による検討では、各症状群とも著しい差は認められなかった。

表4 自覚的疲労症状各群別の訴え率

			月	火	水	木	金
訴え率%	Ⅰ	午 前	24.2	19.8	22.1	12.8	4.4
		午 後	0.7	6.6	3.9	2.8	10.3
	Ⅱ	午 前	16.7	11.6	11.4	5.0	1.4
		午 後	0.4	1.9	1.8	1.6	5.3
	Ⅲ	午 前	11.0	8.4	8.7	7.7	2.5
		午 後	1.5	3.7	3.8	3.8	6.7

Ⅳ 考 察

本来「疲労」という現象は、複雑かつ多岐にわたるものなので、身心の機能の変化、作業能率の低下、疲労感の発現を含めた広範囲の事象として理解されている。しかし疲労現象の調査、測定には多種多様の検査方法がある反面、決定的な検査法は未だになく疲労現象の統一的な把握は困難なのである。

疲労現象のなかで主観的疲労である「疲労感」は、疲労に関する基本的重要な事項であると考ええるが、客観的に数量化することが困難であることから、十分な解析がなされているとはいえない。そのなかでも特に学生を対象として、学校生活のなかでの疲労感を調査したものは殆んど見当たらないといってもよいであろう。

学校は教育を目的とし、機能とする場であって、学生の身心はつねに健康的に確保され、かつ学習能率の向上が図られなければならないのである。そのためには学生は疲労感のない状態で登校し、健康的な学校生活を送ることが基本的条件であると考ええる。このような観点から、学生の授業前後における自覚的疲労症状を調査してみたのである。

学生の自覚的疲労症状の訴え率は、Ⅰ群の「ねむけとだるさ」に関するもの、すなわち疲労の一般的症状に関する訴え率が授業の前後とも最も高くなっていた。症状群の構成についてみても授業の前後とも「Ⅰ＞Ⅱ＞Ⅲ」型（Ⅱ—do—mihah型）、すなわち精神作業型となっているのである。自覚される疲労症状のなかでは、Ⅱ群の「注意集中の困難」に関するものが最も重要な意味を有するものと指摘している。学生の授業前のⅡ群の訴え率は、女子事務作業者の作業前のそれに比べてかなり高く、授業の前後とも「物事に熱心になれない」「根気がなくなる」の2項目の訴え率が特に高くなっていることに注目しなければならないであろう。

症状群の構成は授業前からすでに精神作業型を示し、しかもⅡ群では特定の項目に訴え率が集中していることは、学校外での生活に問題があるのではないかと考える。このことは1年前

に調査した睡眠時間、朝食摂取の有無、家庭環境の3条件を取りあげ、それぞれの生活条件別の自覚的疲労症状の訴え率と比較してみると、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群ともその差が認められ午前授業の訴え率の差が大きく、睡眠時間が少ない者や、朝食欠食者の訴え率が高いことから考えてみても、学生生活条件の疲労感に及ぼす影響が大きいことが推察されるのである。

自覚的疲労症状の訴え率の変動では、各症状群の日内変化度、週内変化度ともに殆んど有意の差は認められなかった。これは本調査対象者の学校生活は精神的学習を主としているが、学習疲労の回復を図るための休憩時間が適度に配分されていると、授業後の調査時点が12時30分から15時50分よりも繰り上げることが可能となり、この時間帯は調査時点として比較的早かったものと考えられる。

自覚的疲労症状調査の成績は、疲労感発生を左右する要因と、一定度の疲労感に基づきこれを質問に応じて訴えさせるか、否かを左右する要因とによってきまると考えられるが、疲労の自覚症状が高次の中枢性の疲労であるとするならば、意識される自覚的疲労症状はその反映として重要な意味をもつものとする。したがって学生の疲労感の把握は、学校保健管理にも直結し、生活指導や保健指導のうえで重要な要素をなすものであると考えることができよう。

関連調査として最近、学生の中に疲労が原因とみられる身体面検査にとどまらず、心理的検査も必要であろう。昭和53年度の札幌市の小学校・中学校で、個別的保健指導の的確な把握のために基礎的調査の一環として、現在多く使用されている「Y G 性格検査一般用」を用いて実施し、学生の実態を考察し今後の指導に役立てたいと考えている。

参考資料 1

Y-G 検査プロフィールの五典型

典 型	英 語 名	形による名称	因 子		
			情緒安定性 B C I N	社会適応性 O C O A E	向 性 G R T A S
A 型	Average Type	平 均 型	平 均	平 均	平 均
B 型	Black List Type	右 寄 り 型	不 安 定	不 適 応	外 向
C 型	Calm Type	左 寄 り 型	安 定	適 応	内 向
D 型	Director Type	右 下 が り 型	安 定	適 応 又 は 平 均	外 向
E 型	Eccentric Type	左 下 が り 型	不 安 定	不 適 応 又 は 平 均	内 向

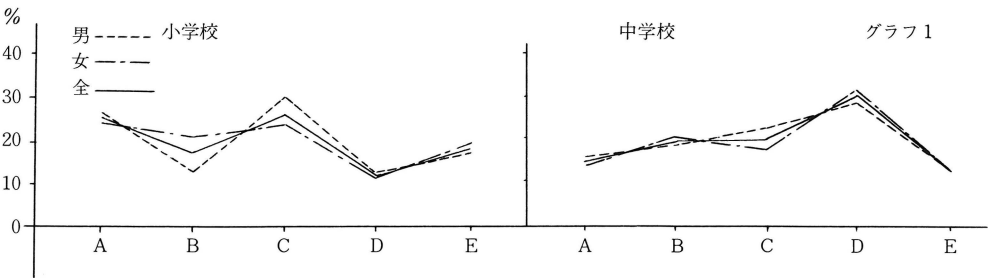
参考資料 2

プロフィール型の分布

小学校

性別	A 型 (平均型)			B 型 (不安定不適応積極型)			C 型 (安定適応消極型)			D 型 (安定積極型)			E 型 (不安定不適応消極型)			計
	A	A'	A''	B	B'	AB	C	C'	AC	D	D'	AD	E	E'	AE	
男	16名 (5.0)	25 (7.9)	42 (13.2)	4 (1.3)	25 (7.9)	14 (4.4)	31 (9.8)	17 (5.4)	47 (14.8)	14 (4.4)	15 (4.7)	15 (4.7)	9 (2.8)	25 (7.9)	18 (5.7)	317
女	20 (6.4)	20 (6.4)	38 (12.1)	7 (2.2)	41 (13.1)	15 (4.8)	20 (6.4)	19 (6.1)	35 (11.1)	8 (2.5)	14 (4.5)	16 (5.1)	10 (3.2)	31 (9.9)	20 (6.4)	314
全	36 (5.7)	45 (7.1)	80 (12.7)	11 (1.7)	66 (10.5)	29 (4.6)	51 (8.1)	36 (5.7)	82 (13.0)	22 (3.5)	29 (4.6)	31 (4.9)	19 (3.0)	56 (8.9)	38 (6.0)	631
男	83 (26.1)			43 (13.6)			95 (30.0)			44 (13.9)			52 (16.4)			317
女	73 (24.8)			63 (20.1)			74 (23.6)			38 (12.1)			61 (19.4)			314
全	161 (25.5)			106 (16.8)			169 (26.8)			82 (13.0)			113 (17.9)			631

性別 \ 型		A 型			B 型			C 型			D 型			E 型			計
		A	A'	A''	B	B'	AB	C	C'	AC	D	D'	AD	E	E'	AE	
男		5名 (3.1)	11 (6.9)	10 (6.3)	10 (6.3)	15 (9.4)	5 (3.1)	15 (9.4)	5 (3.1)	16 (10.0)	19 (11.9)	16 (10.0)	11 (6.9)	4 (2.5)	14 (8.9)	4 (2.5)	160
女		1 (0.7)	7 (5.4)	9 (6.9)	3 (2.3)	17 (13.1)	8 (6.2)	9 (6.9)	5 (3.8)	9 (6.9)	19 (14.6)	16 (12.3)	9 (6.9)	6 (4.6)	5 (3.8)	7 (5.4)	130
全		6 (2.1)	18 (6.2)	19 (6.6)	13 (4.5)	32 (11.1)	13 (4.5)	24 (8.3)	10 (3.4)	25 (8.6)	38 (13.1)	32 (11.0)	20 (6.9)	10 (3.4)	19 (6.5)	11 (3.8)	290
男		26 (16.3)			30 (18.8)			36 (22.5)			46 (28.8)			22 (13.8)			160
女		17 (13.1)			28 (21.5)			23 (17.7)			44 (33.8)			18 (13.8)			130
全		43 (14.8)			58 (20.0)			59 (20.3)			90 (31.0)			40 (13.7)			290



参考資料3 中学生・高校生・大学生のY-G
尺度得点平均と標準偏差

		中 学 3,807名		高 校 2,241名		大 学 6,110名	
		男 1,995名		男 1,129名		男 4,136名	
		女 1,812名		女 1,112名		女 1,974名	
		M	σ	M	σ	M	σ
D	男	9.48	4.45	9.92	5.31	11.23	5.51
	女	10.43	4.95	10.93	4.89	11.73	5.25
C	男	9.71	4.13	9.87	4.67	9.98	4.99
	女	10.19	4.12	11.03	4.54	10.33	4.97
I	男	9.31	4.41	9.42	5.05	8.97	5.52
	女	10.23	4.44	10.77	4.91	9.00	5.38
N	男	8.80	4.24	9.40	5.07	9.72	5.35
	女	9.35	4.44	9.95	4.70	9.76	4.86
O	男	8.48	3.88	7.66	4.11	8.11	4.38
	女	8.94	4.03	8.24	3.92	8.36	4.06
Co	男	9.75	3.69	9.01	3.98	8.34	4.06
	女	9.59	3.83	8.68	3.88	6.88	3.81
Ag	男	11.74	3.65	10.77	3.90	10.87	4.25
	女	11.06	3.64	10.77	3.83	10.45	4.20
R	男	11.58	3.94	10.44	4.57	9.96	4.85
	女	10.70	3.94	9.86	4.44	9.10	4.67
G	男	11.69	4.09	10.92	4.61	10.85	5.16
	女	11.64	4.09	10.86	4.48	10.70	5.11
T	男	10.17	4.15	9.98	4.31	8.16	4.62
	女	10.15	3.91	9.69	4.16	8.08	4.53
A	男	9.32	4.21	8.47	4.74	8.52	5.53
	女	9.57	4.29	8.30	4.78	8.42	5.29
S	男	10.89	4.04	9.79	4.70	10.23	5.48
	女	10.68	4.26	9.14	4.63	10.40	5.28

参考資料4

教師評定とY-G尺度との関係(x^2)

	授業中の 真面目さ	授業中の 積極的発言	学業成績	友人数	リーダー シップ	仲のよさ	ほがらかさ	喧嘩
S	2 7 9	13 12 24	5 5 10	6 7 13	4 12 16	3 7 10	5 4 9	4 5 9
	4 4 7	13 7 21	3 3 6	6 4 10	11 9 20	1 6 7	8 12 20	8 3 11
	6 10 16	26 19 45	8 8 17	12 11 23	16 21 36	4 12 17	13 16 29	12 8 20
T	5 3 7	2 7 8	5 7 12	2 7 9	4 2 6	3 2 5	7 4 11	3 4 7
	2 3 5	1 3 4	3 8 10	2 1 3	1 5 6	1 11 12	2 16 17	8 3 11
	7 6 13	3 10 13	8 15 23	4 8 12	5 7 11	4 13 17	8 20 28	11 7 18
D	2 8 10	1 8 9	4 7 11	3 3 6	1 4 5	3 5 8	10 6 16	2 3 4
	8 10 18	1 1 2	6 2 9	3 7 10	6 6 12	10 15 25	1 7 7	7 5 12
	10 18 28	2 8 10	10 9 19	6 10 16	8 10 18	13 19 33	11 13 14	8 8 16
C	3 5 8	3 2 6	7 2 9	1 8 9	2 1 4	1 2 4	2 5 7	7 3 10
	6 6 13	4 2 6	5 4 8	4 7 10	3 8 10	2 8 10	12 2 14	4 2 6
	9 11 21	7 5 12	12 6 17	5 14 19	5 9 14	4 10 14	15 7 22	11 5 16
R	3 3 7	12 6 17	4 7 11	1 8 9	5 5 9	2 6 8	3 4 7	16 2 18
	5 1 6	5 6 11	2 0 2	7 1 8	11 4 15	3 4 6	6 2 9	2 1 3
	8 4 12	16 12 28	6 7 13	8 10 17	16 9 24	5 10 15	10 6 16	18 3 21
G	1 2 4	13 5 18	3 1 4	2 6 8	10 7 17	5 5 10	2 7 9	3 1 3
	5 0 5	15 3 18	8 4 12	2 6 8	6 7 13	1 4 5	3 4 7	4 2 5
	6 3 9	28 8 35	11 5 16	5 11 16	16 14 29	6 9 15	6 11 16	7 2 9
A	1 2 3	2 6 8	0 1 2	0 7 8	4 5 9	4 3 6	5 5 10	3 1 4
	8 4 12	20 8 28	7 2 9	5 5 11	17 10 27	2 5 7	4 2 6	6 3 8
	9 6 15	22 13 36	7 4 11	6 13 18	21 15 36	6 8 14	8 7 16	9 3 13
I	5 8 13	4 9 13	1 6 7	1 8 9	4 5 8	1 1 2	5 6 11	6 5 11
	6 7 13	8 6 15	11 5 17	4 7 11	5 17 22	5 2 7	2 3 5	8 1 10
	11 15 26	13 15 27	13 11 24	5 15 19	9 22 30	6 3 9	7 9 16	14 7 21
N	1 2 3	1 1 2	2 2 4	1 2 3	5 0 5	1 7 8	6 2 6	5 8 13
	5 5 10	1 2 3	2 3 5	10 4 14	7 3 10	2 12 14	8 8 16	1 2 4
	7 7 13	2 3 5	4 5 9	11 6 17	12 3 15	3 19 22	13 11 24	6 10 17
O	6 8 14	3 7 10	3 5 8	2 10 12	9 4 12	7 6 13	3 2 5	6 1 6
	1 2 3	0 2 2	7 3 9	1 6 7	2 3 5	2 8 9	5 3 9	1 3 4
	7 10 18	3 9 12	10 7 17	3 16 19	10 7 17	9 14 23	8 5 14	7 3 10
Ag	3 2 5	2 2 5	5 3 8	3 5 8	2 3 6	5 2 6	8 3 11	2 1 3
	9 1 10	6 2 8	7 4 11	3 4 7	4 1 6	4 4 8	7 18 9	3 13 16
	12 3 15	8 4 13	11 7 19	6 9 15	6 5 11	8 6 14	15 5 20	5 14 18
Co	6 5 12	13 12 25	11 4 15	6 5 11	1 6 7	12 3 15	6 6 12	3 5 8
	4 10 14	4 1 5	8 5 13	4 4 8	8 3 11	5 7 12	2 2 4	5 2 6
	10 15 26	17 13 30	19 9 28	10 9 20	9 9 18	17 10 27	7 9 16	7 7 14

本学学生は、全般に、D型18歳19.7%、19歳21.4%、A型18歳10.2%、19歳11.5%と平均均型で安定適応型が多いことがわかる。

表5 Y-G性格テスト実施結果

型 年令	A 型			B 型			C 型			D 型			E 型			計
	A	A'	A''	B	B'	AB	C	C'	AC	D	D'	AD	E	E'	AE	
18	9 (5.1)	12 (6.8)	18 (10.2)	10 (5.6)	15 (8.5)	11 (6.2)	4 (2.3)	6 (3.4)	8 (4.5)	27 (15.3)	35 (19.7)	10 (5.6)	3 (1.7)	6 (3.4)	3 (1.7)	177
19	7 (3.8)	15 (8.3)	21 (11.5)	6 (3.3)	8 (4.4)	9 (4.9)	13 (7.1)	7 (3.8)	13 (7.3)	26 (14.3)	39 (21.4)	7 (3.8)	5 (2.7)	3 (1.6)	3 (1.6)	182
18	39			36			18			72			12			177
19	43			23			33			72			11			182

Ⅵ お わ り に

本学学生182名を対象に、月曜日から金曜日までの5日間「自覚的疲労症状調査」（産業疲労研究会の自覚症状調べ）を、午前授業、午後授業の2回にわたって実施し考察を試みたのであるが、その結果つぎのようなまとめをすることができよう。

1 182名の自覚的疲労症状の訴え率は、30項目全体にわたってみると午前授業、午後授業の症状群の構成は授業の前・後とも「Ⅰ＞Ⅱ＞Ⅲ」型（精神作業型）となっていて、各調査時点での症状群の構成もすべて精神作業型となっている。

2 月曜日から金曜日にかけて調査できたが、182名の自覚的疲労症状の訴え率の変動を日内変化度と週内変化度でみるかぎり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群とも有意の差は認めることはできなかった。

3. 現代の学生のおかれている環境は決して良いものとはいえない。最近の報道にみる自殺や非行の記事がマスコミにぎわっているし、情報化社会の刺戟が氾濫し、情緒不安定や緊張状態の継続、そして非活動な生活環境である。しかしこのような悪環境の中にある今日こそ、「心身ともに逞しい人間」であるべく、その姿を求めていかなければならないのであろう。今回は、自覚的疲労症状と、Y G 検査の実施から学ぶことにより相関関係の重要性を改めて痛感させられるとともに、これからの個別的保健指導並びに管理指導の内容を十分検討して望ましい学生の保健指導の効果を高めることに尚一層の努力が大切であることを感じたのである。

参 考 文 献

- 1) 門田新一郎：学生の健康管理に関する研究，生活条件と自覚的疲労症状について，日本衛生学雑誌
- 2) 産業疲労研究会：産業疲労の「自覚症状しらべ」（1970）についての報告，労働の科学
- 3) 辻岡美延：新性格検査法—Y G 性格検査実施応用研究手引
- 4) 第13回北海道学校保健学会発表資料：現代の子どもに即した保健室のあり方
札幌市立中央中学校 養護教諭 西塔方子
札幌市立幌西小学校 養護教諭 多田祥子

(1979. 10. 11)